令和３年度文化庁文化資源活用事業費補助金
（観光拠点整備事業）

国見町

貝田宿
散策ガイド

古えに触れながら

福島県
国見町歴史まちづくりフォーラム
所在地 〒969-1792　福島県伊達郡国見町大字藤田字一丁田二１番７
電　話 024-585-2967（国見町企画調整課）

金草鞋（かねのわらじ）　（1813年～1834年）

旅人が行き来した貝田商の様子

徳江観音寺鉄道絵馬　明治25年（1892年）

かつて貝田の街中を通っていた鉄道

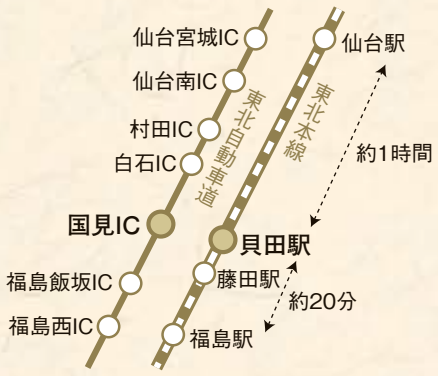
昭和30年代の町並み

現在の町並み

アクセス

■JRをご利用の場合
- 福島駅から貝田駅まで JR東北本線で約20分
- 仙台駅から貝田駅まで JR東北本線で約1時間

■お車をご利用の場合
- 福島から車で約40分（21.8㎞）
- 仙台から東北自動車道国見ICまで約50分（60㎞）



貝田の おまつり

◆秋葉神社 春季例大祭（山車・「宿」制度）　4月中旬
◆盆 踊 り　8月中旬
◆水雲神社 秋季例大祭（「宿」制度）　10月中旬
◆最 禅 寺 観音講

旧貝田宿及び周辺では、宿場の東西に鎮座する水雲神社と秋葉神社におけ る祭礼・宿場の町尻に位置する最禅寺の講の活動などが人々により続けられています。

旧宿場町の範囲に隣接する秋葉神社と旧貝田村の村社である水雲神社の両社は、貝田の鎮守として祀られ、春の祭礼（秋葉神社）と秋の祭礼（水雲神社）が行われています。祭礼は、貝田地区の神社会と町内会に加え「宿」に割り当てられた10軒の家主が中心となり準備と当日の運営がされています。宿は、旧宿場の家々や地区内の10軒が年毎に輪番で担当する制度で、中でも「大宿（おおやど）」とよばれる家がその取りまとめを行います。この10軒は１年を通じて務めています。

水雲神社拝殿

観音堂

秋葉神社のおまつり

貝田宿略年表

天文７年（1538）
「かい田郷」の名前が文献に登場。
「伊達氏段銭帳」

天文22年（1553）
かひ田郷に孫左衛門屋敷、寺屋敷、しつの在家、いしはら在家が存在 して いた。「伊達晴宗采地下賜録」

天正年間（1573～1591）
伊達政宗のころ、藤田宿と越河宿（おいかわじゅく）（白石市）との間に合宿として、貝田宿が置かれたとの伝えがある。

天正16年（1588）
双葉郡富岡村曹洞宗龍臺寺の末寺として、貝田宿に最禅寺（即翁長 曆大和尚）を創建する。

慶長10年頃（1605頃）
貝田を含む光明寺村の戸数73戸、人口247人（男146人、女101人）とあり。「邑鑑」

寛永15年（1638）
上杉藩、貝田宿に口留番所を設置。大内市右衛門を番所役とする。

寛文５年頃（1665頃）
光明寺村より貝田村が分立する。

元禄２年（1689）
５月３日、松尾芭蕉貝田宿を通り白石に向かう。『おくのほそ道』

元禄11年（1698）
「伊達郡貝田村絵図」が描かれる。

宝暦11年（1761）
貝田村の家数52軒、人口281人（男171人、女110人）馬16匹とあり、名主孫十郎、検断兵左衛門の名。
「御巡見使案内控」

天明８年（1788）
６月、古川古松軒が、貝田宿を通り、「民家何れも糸を引き、絹を織り出すゆえにや、家居もよく人物も賤しからず、婦人戸外に出ずること稀なるゆえ、色白く風儀宜し…」と記す。『東遊雑記』

天保３年（1832）
３月、「貝田村宗門人別帳」によれば、名主孫四郎、検断彦次郎、口留番所庄兵衛がみられる。

明治５年（1872）
貝田宿、伝馬所（問屋）、助郷が廃止される。

明治９年（1876）
６月22日、明治天皇東北御巡幸。

明治20年（1887）
12月、東北本線が開通。

明治41年（1908）
４月、貝田、東北本線の機関車からの飛火で大火、全戸数54戸中の28戸が焼失する。

この火災の前後、数年おきに大火が発生する。宿場から蓑蛋のまちへ

昭和27年（1952）
東北本線の貝田信号所から昇格、貝田駅の誕生。

貝田に残る歴史的建造物

明治期から大正期にかけて大型で総２階建の養蚕住宅が軒を並べるようになり、石蔵や土蔵などが付属します。また建物の構造は、瓦葺の屋根が多くなり、軒裏まで塗り込められた外壁など防火の工夫がされるようになります。屋敷内には、屋敷林や防火水槽などが伴うようになります。また大正期以降、町内で普及した国見石をはじめとする凝灰岩の石蔵も、耐火性の強さから好まれるようになりました。

①松田家住宅石蔵

昭和6年(1931)に主屋とともに建築された国見石を用いた蔵。旧奥州街道に面して建つ石造2階建の蔵は、鉄の重厚な扉が耐火性に優れる国見石とともに防火の機能を持っています。壁面の手掘りによるツルメ仕上げと、寄棟造りの屋根が特徴です。

②佐藤家住宅（佐野屋）

旧宿場の中央に位置し、「佐野屋」の屋号を持つ。江戸時代には旅籠を営み、隣接する「得利屋」が脇本陣、佐野屋が本陣であったと伝わります。大正15年(1926)に移築され、養蚕業に適した造りとなっています。広く、光の入る構造となった屋根裏や床下の火鉢、屋根の棟には気抜きなど蚕の温室飼育のための装置が備えられています。

③松田家住宅（養蚕住宅）

この養蚕住宅は、大正4年(1909)に移築された木造2階建の養蚕住宅です。入母屋造りの屋根は瓦葺で、大棟には気抜きが造り付けられています。また壁は、軒裏まで丁寧に塗籠められた大壁造りとなり、一部の壁は漆喰塗、2階部分には鉄板雨戸が取り付けられ、防火の機能を持つ屋敷林とともに隣接地からの延焼を防ぐ工夫がされています。

④貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋

姥神沢に架かる貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋は、明治20年(1887)の黒磯－塩釜間開業当初の旧鉄道橋で、大正9年(1920)まで使用されていました。橋の構造はレンガ積アーチ構造で、町並みに近接して鉄道が往来していた当時の様子を伝えています。

⑤最禅寺本堂

最禅寺は、天正16年(1588)または寛永3年(1626)に開山されたと伝わる曹洞宗の寺院で、旧奥州街道が大きくカーブする町尻に位置しています。寄棟造の現本堂は、桁行7間半梁行6間の大きさで、明和2年(1765)に建てられ、軒はセガイ造りで広くとられています。

本堂内には、本尊とともに観音堂が安置されています。観音堂は、伊達秩父三十四観音の第31番札所として信仰を集めています。

⑥秋葉神社本堂

秋葉神社は、文政10年(1827)に現在の場所に遷座され、火伏の神として信仰されています。平成元年(1989)に再建された現在の本殿は、切妻造りの屋根に、板倉造りの建物です。秋葉神社(秋葉大権現)と金華山神社が祀られています。

貝田村絵図　元禄11年（1698年）

旧貝田宿の名残

江戸時代の貝田宿を伝える建造物は、明治期から大正期の大火により最禅寺を除き残されていませんが、かつての屋号、町割りなどの土地利用、水路・水場などの水利用から当時の名残を確認することができます。

旧問屋・口留番所・本陣・脇本陣・旅籠などの旧家において、現在も当時からの屋号が受け継がれています。得利屋は、安政２年（1855）の『東講商人鏡』に優良旅籠の１つとして記載があり、脇本陣としても使用されました。現在も屋号「得利屋」と呼ばれています。

コラム

御瀧神社（光明寺）

御瀧神社の湧水

伊達朝宗夫人墓　文政4年(1821)建立

貝田地区から車で5分のところにある光明寺集落。豊富な湧水により集落が形成され、現在も水場や水路の維持・管理や水に伴う信仰・祭礼の活動が継承されながら、水が利用されています。

湧水は、透明度の高い水質と豊富な水量により清浄な空間をつくりだし「御瀧神社の湧水」として人々の信仰の対象となっています。さらに一帯の谷地は、平安時代の三常院(976年創建)、鎌倉時代初頭の伊達朝宗夫人墓などにみられるように、古代以降聖域として存在してきました。伊達家4代の伊達政依により「伊達五山」の一つ「光明寺」として整備され、江戸時代まで発展します。